

づけた。「我は我である」と定式化される自覚には、「我は我である」という自己復帰の反省と、それが我であるという自己発展、つまり「我あり」の直観が一つに結び付いている。本書で注目したのは、最後に真実在として出されてくる「絶対自由の意志」である。これは、自己否定の復帰を反省、自己肯定の発展を直観として、両者の否定即肯定の「即」に立つものである。この意志は「自覚的体系の背後」とされるがゆえに、直観と反省を結びつける自覚の背後として、最も深いものと見なされ得るであろう。

しかし、後に「場所」の立場が成立した時に西田は、この書を顧みて、意志の根底に直観を考えていたと語る。すなわち、絶対自由の意志自体が、既に直観を根底に持つものとして受け止め直されるのである。回顧の言葉を前提して以前の著作を検討することは、方法的に問題があるが、少なくとも当時の西田が、意識現象としての思惟、意志、直観をめぐる、ある複雑な事態のうちを動いていたことは十分に確認できる。『自覚に於ける直観と反省』後の『意識の問題』と『芸術と道徳』は、そのことを示すものとして、従来あまり注意されていないが、貴重な書物である。いずれも、「絶対自由の意志」の立場を究極とする前提のもと、前者では、心理学の議論を踏まえつつ、特に「感情」の独自性を取り出す姿勢が顕著となり、後者では、「芸術と道徳」という枠組みのもと、「感情と意志」あるいは「美と善」をめぐる、さらに哲学知の「真」との関係を含め、真善美あるいは知情意の全体に考察が広がっている。芸術と道徳をとともに純粹意志の対象界に属するものと受け止める立

場は、全体としてやや図式的な性格を否めないが、他方で、芸術と道徳と哲学を超えるもの、つまり宗教への眼差しが、意志の根底に改めて直観を認める姿勢となつて垣間見られる。このような展開には、真実在に対する一貫した探究のなか、哲学および関連諸学の知見を積極的に受け止めながら、主題領域の拡がりや深まりに応じて意識の立場そのものを絶えず捉え返していかうとする西田の姿が認められるように思われる。

西田幾多郎「場所」論の宗教的意義

杉本 耕一

中期西田哲学に属する論文「場所」(大正一五年発表)において確立された「場所」の論理は、後期思想においても継承され、西田は生涯にわたって、自身の哲学を「場所」の哲学として論じてゆく。後期西田哲学の核心をなす「世界」の思想は、中期「場所」論以来の発想を継承すると同時に、「行為」の世界としての現実の世界の動性を射程に含むことによってその内実を一新させた「場所」論の意味をもつものとして理解することができる。西田はさらに、最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」(昭和二年発表)になると、この「場所」の論理によって「宗教」の問題を正面から論ずる。「宗教は、哲学的には唯、場所的論理によつてのみ把握せられるのである」[1/425]と云うのが、そこでの西田の立場であった。

西田の「場所」論、あるいは「世界」論というのはもともと、实在の論理的構造をあくまでも「哲学」的にとらえようとして企図された思想であった。我々がそこにおいて生きている

「世界」(「現実の世界」「歴史的世界」)の構造を論理的に明らかにし、そこからすべてを説明するということが、西田にとつての「哲学」の課題である。それでは、右の意味であくまでも「哲学」であった「場所」論が、どのように「宗教」の立場に接続するのであろうか。西田が「場所」の論理によって「宗教」を論ずるとき、それは「宗教」とは明確に区別された「哲学」の立場に両足を置いて、外から「宗教」を「説明」するというのではない。「哲学」としての「場所」の論理が、それ自身すでに「宗教」の立場に足を踏み入れており、両者が不可分に重なっているというところに、西田の思想の独特の性格があると考えられる。もちろん西田は、自身の「哲学」が「宗教」的体験を前提するという批評に反対し、明確に、「私は宗教によつて哲学を論ずるのではない」[8/586]と述べていた。しかし西田は同時に、それに続く言葉として、「唯、我々の歴史的事実の世界の論理的構造の深い分析は自ら古来宗教の真髓と云はれるものに接すると考へるものである」[8/586]と述べ、「哲学」と「宗教」との深いところでの接点を語る。

本発表では、後期西田の「場所」論としての「世界」論を分析することから始め、それが必然的に「宗教」の立場と重なってゆく道筋を明らかにしたい。その際に鍵となるのは、我々の自己の「転換」という事態である。西田は、「如何なる宗教にも、自己の転換と云ふことがなければならぬ」[11/425]と述べ、「自己の転換」というところに宗教の本質を見出す。しかるに、「世界」論の根幹としての「世界の自覚」という思想は、まさに我々の「自己」に「転換」を迫る思想、「自己」の

「転換」を通してのみ本当に自分のものとして理解される思想でなければならない。「世界の自覚」の立場は、我々の「自己の自覚」が「世界の自覚」と一つにのみ成立することを説くのだが、我々の自己、とりわけ、自己が現実の世界の中で他と対立しつつ能動的に行爲するものとしての自己にとって、それを受け入れるということは、旧来の自己が一度翻されるということなしにはありえない(ただし、逆説的ではあるが、「自己の転換」が起りうるのが(あるいはそもそもそういうことが問題となるのが)徹底的に自己自身であろうとする極限的な「自己」においてであることは注意されるべきであろう)。

西田の「場所」論と「宗教」の立場との重なりは、西田が道元の「自己をわする」といふは、万法に証せらるゝなり」等の言葉を、一方で「真理を知る」立場という「哲学」的な文脈で引用する[11/70]と同時に、他方で「悟によつて救はれる」という明らかに「宗教」的な文脈で引用している[11/411]ところからも見てとることができる。

西谷啓治の「根源的構想力の発動」について

小野 真

西谷啓治の晩年の論文「空と即」(一九八一年)においては、伝統的な理解に沿って、「共通感覚」を「諸感覚の間における補完的な統合の根基」をなすものとしたうえで、「視覚・聴覚等々の特殊性を離れた」共通感覚自身に固有な機能として「imagination(構想力)」の側面が挙げられる。ただ、「空と即」においては、imageは、禅僧達の「空の場」の境地とも